アルケイア―記録・情報・歴史―
第20号　2025年11月　*45-70*頁
南山アーカイブズ

1922年官営質業労働組合ストライキとムハマディヤ

小 林 寧 子
東洋大学客員研究員

The 1922 Pawnshop Workers' Strike and Muhammadiyah

Visiting Reseacher, Toyo University
KOBAYASHI, Yasuko

Archeia: Documents, Information and History
No.20 November, 2025 pp.*45-70*
Nanzan Archives

はじめに
１．1920年代前半のムハマディヤ関連資料
(1) ムハマディヤ側の記録
(2) オランダ語刊行物
(3) 植民地政府文書
２．1920年代初頭のムハマディヤ
３．官営質業労働組合ストライキとムハマディヤ
1) 官営質業労働組合ストライキの経緯
2) ムハマディヤの官営質業労働組合ストライキへの関わり
3) ムハマディヤと利子
4) ムハマディヤ、ファフロディンにとっての教訓
おわりに
参考文献

1922年官営質業労働組合ストライキとムハマディヤ

小 林 寧 子

はじめに

世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアには、ふたつの主流派ムスリム団体がある。このうち「イスラーム（近代）改革派」とされるムハマディヤ（Muhammadiyah/Moehammadijah：ムハンマドに従う人々）は、1912年に中部ジャワの古都ジョクジャカルタで誕生し、教育・社会福祉活動で実績を重ねて組織を拡大した。オランダ植民地支配下[1]のムハマディヤについてはアルフィアン［Alfian 1989］がその概略を示し、現在に至るまでムハマディヤ史のスタンダードとなっている。しかしながら、アルフィアンは植民地文書に多くを頼ったために、実際に運動を担った当事者の声が伝わって来ない。特に初期ムハマディヤの組織構築にはいくつもの試練があったにも拘わらず、現場のムスリムがどのように試行錯誤したのかは描かれていない。ムハマディヤ史研究にはまだ課題が多いが、植民地期に関して第一次資料を用いた研究は極めて限られている。

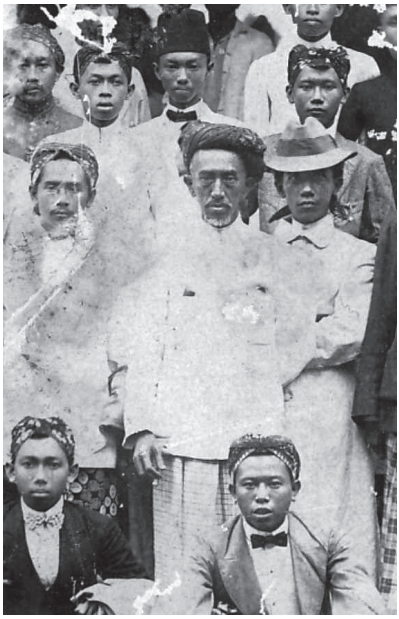
その原因のひとつは、従来の研究では、植民地期のインドネシア人の運動体は、ナショナリズム、イスラーム、コミュニズムのいずれかの思想潮流に分類されて考察されることが多かったからだ。その中ではナショナリズムへの貢献が重視され、イスラーム運動は軽視される傾向にあった。また、ムハマディヤはコミュニズムのように植民地政府の警戒心を呼ぶこともなく、植民地支配に強く抵抗しないと考えられた。しかも、ムハマディヤのライバルとなる「イスラーム伝統派」とされる団体ナフダトゥル・ウラマー（Nahdlatul Ulama/Nahdlatoel Oelama：ウラマー〈宗教学者〉の覚醒、以下NU）が現在政治との関りで関心を集めているために、内外の研究者のムハマディ

[1] インドネシアは日本が軍事占領する1942年3月までオランダの植民地支配下にあり、「オランダ領東インド」と呼ばれた。第2次世界大戦中は日本の占領下におかれたが、日本の敗戦を機に1945年8月17日に独立を宣言した。

ヤに対する関心は低くなっていることも影響している。ムハマディヤが独立前に全国展開した唯一のインドネシア人組織であることはほとんど忘れ去られている。

一方、インドネシアではムハマディヤに関する文献はかなり多く出版されているものの、典拠を示さないかもしくは伝聞（hearsay）に頼るものが多く、同時代資料による検証作業は乏しい。現在のムハマディヤ本部が提供する情報にさえ、裏付けが不確かなものがある。しかしながら、ムハマディヤは植民地期に誕生したインドネシア人団体の中では例外的に独自の記録を部分的であれ保管しており、その活用が望まれている。また、記録が存在するということ自体は、ムハマディヤが組織活動を通して発展したという証拠であり、組織活動ではなく言説で強いNUとは組織のあり方がかなり異なることを示している[2]。

ムハマディヤをインドネシア近現代史の中で再考察するには、先述の「政治と関わらずに植民地政府と協調的であった」というイメージを改めて検証する必要がある。



1）アフマド・ダフラン（中央）
スアラ・ムハマディヤ事務所（ジョクジャカルタ）で2023年8月入手

このようなイメージがステレオタイプ化されたのは、スラカルタ（中部ジャワ）の副理事官であったペトリュス・ブリュムブルヘルの「ムハマディヤの活動は政治の外にあった」［Petrus Belumberger 1931: 92］という見解に始まる。アルフィアンも、「ジャワでのムハマディヤはラディカルなナショナリズムを避ける非政治的な性格であった」［Alfian 1989: 205］、と述べている。その後ムハマディヤに関しては、「植民地政府に対して協調的な路線を取ってきた」［土屋 1982: 450］、さらに「創立以来一貫して政治的に中立を堅持した」［中村 1994: 424］とされて、その認識が今に至るまで通用している。しかし、何をもってそう認識されたのか、またそれはどういう理由によるもの

[2] NUの組織のあり方については、小林［2014, 2015］を参照のこと。

かを改めて考察する必要があるように思える。というのも、後述するように創設者のアフマド・ダフラン（Ahmad Dahlan, 1869-1923：以下ダフラン）は様々な団体の指導者との交流があり、その中には急進的な活動家もいた。また、ダフランの没後にムハマディヤの筆頭副会長になったファフロディン（Fachrodin, 1884/1889/1890）は、「過激な（extremisch）人物」［Kwantes 1975: 448］として知られている。ファフロディンはダフランが礎をつくったあと、ムハマディヤを小さな地方組織から全国組織へと発展させる司令塔としての役割を果たした。過激な人物にできることだろうか。

2）ファフロディン
スアラ・ムハマディヤ事務所（ジョクジャカルタ）で2023年8月入手

本稿では、このような疑問を解明するためのひとつの試みとして、1922年1月から2月にかけてジョクジャカルタを中心に起きた官営質業労働組合によるストライキをめぐるムハマディヤの動きを考察する。この争議は「ブミプトラ官営質業労働組合（Perserikatan Pekerdja Pegadaian Boemipoetra、以下PPPB）」[3]が、労働条件の変更を不服としてストライキに突入したものである。ムハマディヤはこれに支持を表明したとされているが、ストライキは頓挫して参加者は大量解雇された。これ以降1920年代末までムハマディヤはふたつの問題、「政治と関わろうとしない」「（PPPBから）利子を取った」として批判され続けた。これはいったいどういうことを指しているのであろうか。また、実際には何が起きたのかを当時の資料をもとに明らかにする。

以下、次のように論じる。まず、官営質業労働組合ストライキ前後のムハマディヤに関してはどういう資料があるかを示す。次に、このストライキ前のムハマディヤの組織はどのような状態であったのか、またストライキはいかなる経緯で起きたのかの概略を示す。それをおさえたうえで、ムハマディヤはこのストライキとどのように関わったのかを、上述のふたつの問題に関わる当時の資料を示して検証する。

[3] ブミプトラとは「土地の子」という意味で、植民地期は「原住民」とも訳される。PPPBはヨーロッパ人職員主体の労働組合から分離して結成された関係で「ブミプトラ」を組合名に冠した［Petrus Blumberger 1931: 130］。本稿では「インドネシア人」という呼称がまだ定着していない時期を論じるため、以下ではこの「ブミプトラ」を用いる。

1．1920年代前半のムハマディヤ関連資料

(1) ムハマディヤ側の記録

当事者であるムハマディヤの活動家の声を聞くには、以下のムハマディヤ自身による記録がある。

a. 機関紙『スワラ・ムハマディヤ』(*Soewara Moehammadijah*：ムハマディヤの声)

1915年にジャワ文字・ジャワ語で出版されたもののすぐ休刊となったが、1920年末にアルファベット表記で月刊誌として再開された。当初は大半がジャワ語で書かれており、一部がムラユ（Melayu）語（マレー語）で掲載された。ジャワ語は中・東部ジャワで話される地方語であり、当時はのちのインドネシア語になるムラユ語はあまり普及していなかった。1922年時点ではムハマディヤの活動に関する記事はまだ充実していない。1923年からはムラユ語に統一されて、内容も一新した。支部・会員向けに編集されており、本部の方針、学校運営に関する説明など、ムハマディヤ運動に必要な情報を提供するとともに活動の詳細を記している［小林 2022］。なお、1923年11月号以降タイトルは『スアラ･ムハマディヤ』(*Soeara Moehammadijah*）と記されている。

b. “Surat KHA Dahlan”（KHA ダフラン文書）

ムハマディヤ本部が組織内部署への通達と外部の組織や個人に宛てた文書である。1921年4月19日付から同年12月29日付までの130通余りが、2022年11月からデジタル公開されている。大半がムラユ語で書かれているが、中にはジャワ語、オランダ語、アラビア語もあり、手書きもあるがほとんどがタイプ印刷である［小林 2023a］。その多くに会長（ダフラン）の署名はあるが、ダフラン個人の書簡ではない。

c. “Notulen Vergadering Hoofdbestuur Moehammadijah”（ムハマディヤ本部議事録、以下NVHM）

1922年4月から1925年11月まで本部で何が話し合われたかを知ることができる。会議は不定期ではあるが、平均すると2週間に1度の割合で開かれており、本部委員は組織の問題に関する情報を共有していることがわかる。手書きのムラユ語で記されている。ジャカルタの国立文書館に所蔵されている。

b.とc.は官営質業労働組合ストライキの時期とは重ならないが、当時のムハマディヤが何を重視していたのかを知ることができる。

(2) オランダ語刊行物

オランダ語メディアによる情報は、現在オランダのデータベースDelpherから次の

二つが検索できる。

a. *Overzicht van de Inlandsche en Maleisch-Chineesche Pers*（マレー語・中国語原住民定期刊行物摘要）、以下IPO

1917年頃から、バライ・プスタカ（Balai Poestaka/ Volkslectuur：国民図書）が毎週出版したマレー語（ムラユ語）・中国語の定期刊行物 の主に政治関係の記事をオランダ語で要約した報告書である。おおむね忠実に翻訳・要約されている。特に1920年代半ば頃までのIPOでは、ひとつひとつの記事の要約が比較的に長文で、時には全訳に近い形で掲載されている。

b. オランダ語新聞

Bataviaasch Nieuwsblad, De Locomotief など。

（3）植民地政府文書

原住民問題顧問局（Kantoor voor Inlandsche Zaken）[4]、司法長官や理事州理事官の手になる報告書。

２．1920年代初頭のムハマディヤ

20世紀初頭にオランダは新しい植民地政策である「倫理政策」を宣言し、植民地を近代化によって再編成することをめざした。政策の柱のひとつは教育であり、植民地官吏養成のためのエリート教育が重視された。その影響で、ブミプトラ（原住民）が自らの権益を主張する気運が高まり、いくつものブミプトラ団体が誕生した。1908年に下級プリヤイ（prijai：ジャワ人貴族・官吏）が中心となって結成されたブディ・ウトモ（Boedi Oetomo：崇高な努力）は民族主義運動団体の嚆矢とされる。続いて1912（1911）年にイスラーム同盟（Sarekat Islam）が設立され、ブミプトラ社会の熱気を取り込んで急速に拡大した。また、19世紀からオランダ人労働者によって結成された労働組合にブミプトラ労働者も加盟したりあるいは独自の組合を結成したりして、労働組合活動も活発化した。このような動きをプルグラカン（pergerakan：運動）と呼ぶ。

[4] イスラームやインドネシアの社会や文化に関する専門家を係官とした。報告書では総督に状況報告や助言を行うほか、内務官僚宛てに直接提言することもあった。ブミプトラの運動指導者との接触も多く、主だった集会・会合には出席・実見して報告書を作成した。植民地政府機構の中では異色の部局である。

ムハマディヤもプルグラカン組織の一つとして誕生した。ダフランは王侯領ジョクジャカルタの大モスクの宗教役人で、イスラーム学の研鑽を積んでおり、従来のイスラーム教育の改革をめざしてムハマディヤを設立した。ムハマディヤは1912年11月18日に設立を宣言し、1914年8月22日に植民地政府から法人格を取得した。ジョクジャカルタ理事州内で宗教・教育活動を行う団体として出発した。同時期に巨大な組織に成長したイスラーム同盟の陰に隠れて、当初は植民地政府からは番外扱いされていた。当初は組織活動と言えるほどのものは少なく、ダフランは発祥地のカウマン（Kaoeman）[5] で宗教講話を通じて周辺住民に働きかける一方、弟子たちを組織幹部に養成することに力を注いだ。活動が軌道に乗り始めると、1920年5月20日に活動領域をジョクジャカルタ理事州からジャワ・マドゥラへ拡大する規約改訂を申請して8月16日に認可され、1921年5月7日にはさらにそれを全東インド（インドネシア）へと広げることを申請して9月2日に認可された。ジョクジャカルタ理事州外の最初の支部は1921年11月のブローラ（Blora、東ジャワ）であり、12月にはスラバヤ（Soerabaja、東ジャワ）、クパンジェン（Kepandjen、東ジャワ）がそれに続いた［Surat KHA Dahlan］。また、1920年6月に本部に4つの部署（宣教、教育、図書・出版、社会福祉）を設け、体系的な組織活動ができる体制を整えた［小林 2024b］。つまり、官営質業労働組合ストライキ前夜のムハマディヤは、組織を整備して拡大させる事業に着手したばかりの時期であった。

ダフランはブディ・ウトモには早くに入会して組織のあり方を学ぶ一方、ムハマディヤ設立にはブディ・ウトモから支援を受けた。また、イスラーム同盟でも当初から中央委員会委員に名を連ねており［Shiraishi 1990: 51］、1914年に設立したイスラーム同盟全体を統括するイスラーム同盟中央（Centraal Sarekat Islam、以下CSI）でも顧問（宗教分野）に迎えられた［Shiraishi 1991: 73, 75］。

当時のイスラーム同盟の事情をかいつまんで説明する。イスラーム同盟スマラン支部には1914年に同地に設立した東インド社会主義民主同盟（Indische Sociaal-Democratische Vereeniging、以下ISDV）の同盟員が入会していた。CSIは当初は政府に融和的であったが、次第に急進化して1918年CSI大会では労働組合運動を主な活動領域に採択した［Shiraishi 1990: 107］。ISDVも労働組合運動に影響力を強めてCSIを脅

[5] 大モスク周辺に広がる地域で、宗教役人とその家族が中核となる住民であった。

かす存在になりつつあった。ISDVは1920年5月に東インド共産主義者同盟（Perserikatan Komunis di India：以下、共産党）と改称し[6]、イスラーム同盟はスマラン派と中央・ジョクジャカルタ派に分かれて対立した[7]。それぞれの拠点があるスマランとジョクジャカルタでは労働運動が活発だった［深見 1983: 57］。そのような中、共産党員をイスラーム同盟から追放する二重党籍禁止の規律が1921年10月CSI大会で採択された［Shiraishi 1990: 231］。官営質業労働組合ストライキが起きたのは、このイスラーム同盟内の対立が先鋭化した時期でもあった。

一方、ムハマディヤ会長のダフランはブミプトラ運動の指導者には批判的で知られていたようである［*De Preangerbode* 8 March 1922］[8]。しかし、次にあげるようにイスラーム同盟左派系の指導者や活動家はムハマディヤ本部での講演に招待されている。

① ISDVの指導者バールス（Baars, 1892-1944）とスマディ（Soemadi）、1919年4月26日［*De Indier* 27 April 1918］。

② ISDV指導者のダルソノ（Darsono, 1897-1976）とセマウン（Semaun, 1897-1976）［Syuja' 2009: 176-178］[9]。

③ クパンジェンの赤色イスラーム同盟系の活動家ウォロ・スナルヨ（Woro Soenarjo）とウォロ・サストロアトモジョ（Woro Sastroatmodjo）、1921年12月21日［Syuja' 2009: 168-172］［Surat KHAD］。

④ 共産党の議長タン・マラカ（Tan Malaka, 1897-1949）。コミュニズムについてムハマディヤの指導者に話すように依頼されたが、講演の1週間前、1922年2月

[6] 1924年6月「インドネシア共産党（Partij Komunis Indonesia）と改称した。

[7] 両者の前者の陣営に入った側は赤色イスラーム同盟（Sarekat Islam Merah）、後者は白色イスラーム同盟（Sarekat Islam Poetih）とも呼ばれた。

[8] 特にイスラーム同盟中央の指導者が政治優先であったことには不満を抱いていたと考えられる［小林 2024a］。しかし、ダフランは晩年までイスラーム同盟中央の宗教顧問の役職についており、関係を断つことはなかった。

[9] この講演はいつ行われたかは不明である。他の資料からも確認できなかったが、実際に行われた可能性はある。スジャック（Soedjak, 1882-1962：ファフロディンの実兄）は、その講演後に公務員職にある会員が何人もムハマディヤ退会願いを出したという［Syuja' 2009: 176-178］。なお、ダフランが1919年11月30日にスマランで「人間の絆」と題して講演を行ったときにも、聴衆の中にはセマウンとその友人たちがいた［*De Locomotief* 1 December 1919］。ダフランとセマウンはお互いに顔見知りであった。

13日にバンドンで逮捕されて講演は実現できなかった［Malaka 1922: 43］[10]。

このうち④のタン・マラカの回顧録には、1921年12月共産党大会には各団体の代表も参加してイスラーム同盟の党規律についての議論も行われたという一節がある。タン・マラカはこの規定（注：二重党籍禁止）の廃止を要請したが、CSI指導者のアブドゥル・ムイス（Abdoel Moeis, 1883-1959）はイスラーム同盟内の対立を蒸し返したという。ところが、ムハマディヤ指導者のハディクスモ（Hadikoesoemo, 1890-1954：ファフロディンの実弟）はタン・マラカの意見に賛同し、困窮する民衆の統一（persatoean rakjat melarat）を引き裂いてはならないと主張したという［Malaka 1922: 42］。タン・マラカがムハマディヤ本部での講演に招待されたのはそのあとのことである。会長であるダフランが認めなければそういう招待はありえない。この時期の政治的緊迫性からすると、何とも鷹揚な姿勢である。ほかにもダフランは、スラカルタの通称ハジ・ミスバ（Hadji Misbach, c.1876-1926：以下ミスバ）が1919年5月に農民運動活動で逮捕されたときには、ハルソルメクソ（Harsoloemekso）[11]とともに総督に釈放を要求する電報を送った［Shiraishi 1990: 167］。ミスバはバティック商、ジャーナリストでもあり、イスラームの宣教師としても活動しており、ダフランとは旧知の仲であった。以上からすると、ダフランは確かに中立的な姿勢を貫いたが、単なる日和見主義ではなかった。共産党の指導者からも話を聴こうとする姿勢を見せるだけでなく、他宗教の指導者とも交流し、各宗教の勉強会にも参加した。近代教育を享受しないキヤイ（kijai）[12]と呼ばれるイスラーム指導者がこのように多彩で幅広い交流をするのは、当時としては極めて異例と思われる。社会の動向に目を配っていたのであろう。

ダフランは弟子の青年たちにも多くの団体に入って経験を積むように促していた。なかでも1915年からムハマディヤの本部委員となっていたファフロディンは、ダフランの弟子たちの中でも目立つ存在であった。ファフロディンはジャーナリストで、

[10] 当時イスラーム同盟スマラン支部（共産党の拠点）は巡礼規制緩和に取り組んでおり［McVey 2006 (1965): 116］、ダフランも巡礼者の困難や負担軽減を政府に働きかけていた。

[11] スラカルタのバティック商で、ミスバが設立した宣教団体「信任・信託・布教・善（Sidik Amanat Tableg Vatnah）」の事務局長を務めた。後述するように、ファフロディンがミスバと袂を分かったときに、ともにこの団体を去った［Shiraishi 1990: 260］。

[12] ジャワのイスラームの学識者に対する敬称である。主にプサントレン（pesantren）と呼ばれるイスラーム寄宿塾の主宰者が年齢を重ねてその業績が周辺社会に認められたときにキヤイと呼ばれた。ダフランは比較的早くからキヤイと呼ばれていた。

1918年中ごろから週刊誌『スリ・ディポネゴロ（*Sri Diponegoro*）』を発刊した。そこに掲載されたコラムの論調は急進的で、IPOでは「過激な紙誌（extremiche bladen）」に分類された。ファフロディンはCSI指導者のチョクロアミノト（Tjokroaminoto, 1882-1934）やアグス・サリム（Agoes Salim, 1884-1954）と親交を結び、1919年11月にはCSIでも中央委員となった。『スリ・ディポネゴロ』は、植民地政府や砂糖農園に対する批判が強く、社会主義的志向性の強い論調が目立った。1919年3月、砂糖農園を攻撃する論説が原因でファフロディンは報道規制法違反（persdilect）の罰則を受け、『スリ・ディポネゴロ』の編集責任を下りた[13]。ダフランは、そのようなファフロディンに手を焼きながらも見守っていたようである。

労働争議に関しては、ダフランはこれを批判的に見ていたようである。ダフランはストライキを暴力と考え、製糖工場労働者を組織化した工場労働者組合（Personeel Fabriek Bond、以下PFB）委員長のスルヨプラノト（Soejopranoto, 1871-1959）[14]の全盛期（注：1920年前後）に何度も製糖工場でストライキをやめるように話したという［*Bataviaansch Nieuwsblad* 2 March 1923］。また、砂糖農園企業とつながりがある政経連合（Politiek-Ekonomische Bond, 以下 PEB）[15]ではゲストスピーカーにならないようにとムハマディヤ会員、チョクロアミノト、アグス・サリムから説得されたという［Kwantes 1975: 448-449］[16]。ムハマディヤの中には政治的志向性のある会員もいて、ムハマディヤに政治的な方向を与えようとしたサリムが一定の影響力があることは指摘されていた［*Bataviaasch Nieuwsblad* 10 March 1922］[17]。政治をめぐってダフランと弟子

[13] 1919年までのファフロディンについては、小林［2023b］を参照のこと。

[14] ジョクジャカルタの王族パクアラム（Pakoealam）家の出身で、1914年からイスラーム同盟の活動家としても活躍し、1919年にはCSI第2副議長になった。「ストライキ王（Radja Mogok）」とも呼ばれた。

[15] PEBは、民族主義政党や労働組合に対抗するために1919年に設立された親資本家組織である。設立後2年間は製糖工場労働者を主体とするPFBの信頼を失墜させるために活動した。製糖業から資金の提供を受け、その工作員は罷業が起きたときには労働者にスト破りを説得してまわった［Ingelson 1986: 168-169, 181, 186］。

[16] ダフランはPEBからその小冊子『人間の絆』のオランダ語版を2000部から3000部提供してほしいというPEBの要請を断ったという。『人間の絆』は現存するダフランの唯一の著作とされている。その中でダフランは民族や宗教の違いを越えて連帯するように訴えている［小林 2024a］。PEBはダフランを利用しようとしていた。

[17] サリムが一時期ムハマディヤに政治的方向性を与えようとしたことについては、他にも証言がある［Hadjid 2018: 150-151］。

たちとの間に意見の相違があったのは否めない。

3．官営質業労働組合ストライキとムハマディヤ

1）官営質業労働組合ストライキの経緯

このストライキについてはすでにいくつもの先行研究があるので[18]、ここではそれに依拠して概略を述べる。

植民地インドネシアでは、第一次大戦期には約100あまりの労働組合が生まれており［Petrus Blumberger 1931: 129-130］、1919年には約200を数えた［深見 1983: 56］[19]。ジャワは1918年から1920年には物価騰貴や自然災害に見舞われ、しかも先述した通り当初はCSIが労働組合で指導的な役割を果たし、1920年に労働組合運動はピークを迎えた。PPPBは、ヨーロッパ人主体の労働組合で人種差別的扱いを受けたブミプトラ職員がそれから分離して1915年に結成された。1919年には組合員4,000人を数え、イスラーム同盟の影響下にある労働組合としては、PFBと鉄道労組（Vereeniging voor Spoor- en Tramwegpersoneel、以下VSTP）に次いで規模が大きかった［深見 1983: 54, 56-57］[20]。このうちVSTPはISDV/共産党の拠点であり、一方PFBでもスルヨプラノトが共産党勢力に圧されて1921年末に組織を離れた［深見 1983: 65］［McVey 2006 (1965): 113］。PPPBはCSIが指導権を握る最後の砦となる労働組合であった。

数年来PPPB内では、低賃金のほかにもヨーロッパ人質屋店主によるブミプトラ職員の差別的待遇に不満が募り、ストライキ決行への圧力が高まっていた。それに対して組合委員長のソスロカルドノ（Sosrokardono）は闘争資金の不足や準備が整わないとして慎重な姿勢をとっていた。組合は、政府との交渉に望みをつなぐ一方、組合員の不満が暴発しないように抑えることに腐心していた［Ingelson 1986: 106-116］。

1921年3月に新しく総督に就任したフォック（D. Fock, 任期1921年3月-1926年9月）は、ブミプトラの運動にリベラルな対応をした前任者ファン・リンブルフ・スティルム（van Limburg Strum, 任期1916年3月-1921年3月）とは異なる厳しい姿勢で臨んだ。経済不況

[18] 次のものがあげられる。永積［1971］、Ingleson［1986 106-116, 214-228］、Shiraishi［1990: 233-235］、水野［2020: 98-99］。

[19] 職能団体・労働組合の機関誌は1920年で11誌、1921年13誌、1922年14誌、1923年20誌が確認される。大半はジャワで出版されている［Kobayashi 2020: 105］。

[20] 多くの文献はPPPBの結成を1916年としているが、実際は1915年である［深見 1983: 56, 57］。

の中、フォックは財政緊縮政策を断行し、その一環として官営質業の人員削減があった。従来質入れされていた物品（質草）を運搬するのは傭員であったが、この傭員が削減されて職員がそれを命じられるようになった。これは下級ながらもプリヤイとしてのブミプトラ職員の自尊心を侵害することになった。折しも、ソスロカルドノは「イスラーム同盟B部事件」[21] に連座して逮捕されており、CSI副議長のアブドゥル・ムイスがその代行となっていた。なお、チョクロアミノトも同様に収監されていた。

1922年1月11日、ジョクジャカルタ市内中央部のングパサン（Ngoepasan）の質屋で質草の運搬業務を拒否したブミプトラ職員が休職処分になり、この職員に同調した同僚職員40人が罷業した。この罷業はムイスなどのCSI指導者やPPPB幹部の不意をついたものであったが、ストライキが広がるのを止めることはできなかった。2週間後には、ジャワの質屋360軒のうち79軒で職員がストライキに入った［Petrus Blumbenger 1931: 140］。ストライキは「政府に対する全国的闘争の性格をもった」［水野 2023: 99］。しかし、ムイスはゼネスト決行の日を決める予定だった2月11-12日の会合の前に逮捕され、2月8日にはジョクジャカルタで集会禁止令が出された。ムイスに代わって指揮をとったアグス・サリムは2月20日のゼネスト不発で敗北を認めた［Ingelson 1986: 225-226］。最終的には、全職員の5分の1にあたる約1000人もの解雇者を出してストライキは終息した［Petrus Blumberger 1931: 140］。

先行研究が明らかにしたのは、このストライキは準備を整えたうえで実施に踏み切ったのではなく、指導部の思惑とは別に一部の組合員が罷業に走りそれが拡大した「山猫ストライキ」だったということである。また、政府は断固たる措置を取り、組合側の要求は通らないばかりでなく大量解雇とという結末となった。CSIはこれで労働組合での指導権を失い、4月に出所したチョクロアミノトは、PPPB再建で指導権を握ろうとしたが、失敗した［Shiraishi 1990: 237-28］。これ以降労働運動ではCSIの関与は弱まり、代わって共産党の影響力が強まった。

2）ムハマディヤの官営質業労働組合ストライキへの関わり

ムハマディヤはこのストライキとどう関わったのかを、当時の文書や新聞などから時系列的に追う。

[21] 1919年西ジャワガルット（Garoet）での宗教運動が政府転覆を企てるイスラーム同盟の裏組織B部であると疑われ、イスラーム同盟に対する取り締まりが強化された。

最初にムハマディヤの名前が出てくるのは1月15日にPPPBで開かれた抗議集会であり、CSI、共産党、ブディ・ウトモと並んで、ムハマディヤも代表を送った［*De Preangerbode* 20 January 1922］［永積 1971: 123-124］。次に、ジョクジャカルタ理事官の報告書（1922年2月2日第35号）［Mailr.x No. 208, 1922］[22] には3回言及がある。まず、1月20日夜のPPPB事務所での「闘争激励委員会（Comite menegoehkan keberanian pergerakan）」の会合には、CSI委員としてアブドゥル・ムイスやサリムなどのほかに他の団体代表も参加し、その中にもムハマディヤの名前がある。ムハマディヤ独自の集会については次のように報告されている。

> 1月19日夜のムハマディヤ・タブリグ（tableg：宣教）部の公開集会。
> 集会は宗教的言辞で始まったが、結局のところストライキ参加者への支持が表明され、それは連帯心から生じたものだった。そのためにストライキの動機は全く考慮されず、政府の措置に対する組織的な抵抗だけが共感に値するものとなった。・・・
> 1月21日夜、ムハマディヤ・イモギリ支部の公開集会。
> ここでもまた、アッラーを引用した多くの厳かな言葉が述べられたが、最後にはストライキ参加者への同情の表明に至った。［Mailr.x No.208, 1922］

宣教部の責任者はファフロディンであることから、1月15日の抗議集会や20日の会合に参加したムハマディヤの代表はやはりファフロディンであろう。また、先述の「闘争激励委員会」のビラには、ストライキ参加者への支援を期待する諸組織の中にムハマディヤの名前もある［*Het Nieuws van den Dag* 2 February 1922］。さらに、ストライキを支援する委員会の指導者には、スルヨプラノト、スワルディ[23]、サリムらと並んでファフロディンも名を連ねている［*Indische Courant* 9 February 1922］。なお、サリムのストライキ敗北宣言前日の2月19日にムハマディヤが王宮前広場で集会を開いてストライキ参加者への支援金を募るも、人は多く集まらなかった［*De Indische Courant* 20 February 1922］。ストライキ関連でムハマディヤの名前が新聞に登場するのはこれが最後である。

[22] Mailr.はMailrapport（送付報告書）の略。xはその報告書が秘密（geheim）であったことを示す。なお、この部分には「1月22日報告」という但し書きがあるが、何を意味するのかは不明。

[23] スルヨプラノトの実弟で、高名な民族運動指導者スワルディ・スルヤニングラット（Soewardi Soerjaningrat, 1889-1959）のこと。民族教育の推進に努め、のちにキ・ハジャル・デワントロ（Ki Hadjar Dewantoro）の名前で知られるようになった。

以上の経緯からすれば、ファフロディンが主導してムハマディヤをストライキに関与させたことになる。しかし、3月1日に出版された『スワラ・ムハマディヤ』には以下のような呼びかけがジャワ語で掲載された。執筆者の署名はないが、編集長はファフロディンであり、ファフロディン自身が書いたと考えられる。

思わぬところで躓く（Kasandoenging Rata）

私は私たちの協会ムハマディヤがともに打ちのめされたというはっきりとしたニュースを聞いた。理由はこういうことである。

先月ジョクジャカルタ・ングパサンの質屋職員はストライキをした。ングパサン職員のストライキは他の質屋同僚を巻き込んだ。また、ジョクジャの質屋職員の中でも気弱な人以外は多くがストライキに参加した。

伝えられたのは、イモギリの質屋職員は同僚たちに遅れをとりたくなくてすぐストライキに参加した、ということである。イモギリ職員ストライキは、ムハマディヤ・イモギリ支部事務局長になった質屋職員がストライキに参加したからだ。この人物はのちに（職場に：訳者注）戻るであろうが、ムハマディヤ・イモギリ支部事務局長としての立場からストライキをせざるを得なかった。

私のイモギリの知り合いが言うには、この人はムハマディヤ協会では活動的な方だ。それどころか、最も進歩的であり、そこのムハマディヤ協会では真に模範となる人物だった。しかしながら、すでにストライキをしてしまったらいかんともしがたい。

イモギリの私たちのムハマディヤ協会への私の期待と祈りは、イモギリ・ムハマディヤのもとにある会員が無事でありそしてますます進歩するように、という以外にはない。それだけではなく、イモギリのムハマディヤ支部事務局長のストライキが問題がないことを期待する。

それでは、ストライキの参加者に重くのしかかるものは何か。私たちの協会ムハマディヤは巻き込まれて叩きのめされてしまう、ということだ。

私は『スワラ・ムハマディヤ』の誌面を読んだ、その編集部の協力者になったのはムハマディヤの部署すべてだ。しかし、第3号にいたるまで、すべてのムハマディヤ部署はまだその声を届けていない。本当にストライキに参加したのか。仮に質屋職員ストライキに加わってしまったのなら、「戻れ」と私は言いたい。しかし、私は少し懸念する、たぶんこのムハマディヤの一部のストライキは、ムハマディヤ本部にまで波及する可能性がある。もしもそれが本当になったら、ムハマディヤは灰塵に帰してしまうのではないか。それではあまりに残念だ。

＊やあ、10と10をひとつにすると5かけるの2、かけるの2で20だ。はっきりしているのは10かける2は、10足す10だ。長い時代にわたる＊。世界はすでに壊れようとしている、季節は移ろう。何に代わるかはわからない。しっぽのようなちっぽけな私の給料から誰に心づけをすることができようか。

地位が劣っているがために揺さぶられ、侮辱され、同意しない品物を運び、食べるものはすでに水分がない乾いた葉っぱだけ、少しでも間違えるとその分給料は取り上げられる。

辛抱強く至正の神に委ねよ。

祈りを　［*Soewara Moehammadijah* 3(3), 1 March 1922: 9］

＊で挟んだ文の意味は不鮮明である。「10」を意味するdasaと「罪」を意味するdosaが掛け合わせられているように見える。当時よく使われる言い回しで独特の意味があったのかもしれない。ここで罪を犯しては取り返しのつかないことになる、というような意味のように思えるが、推測の域を出ない。

最後の部分で質屋職員に対する同情は示されるものの、ムハマディヤのイモギリ支部がストライキに不用意に巻き込まれたことを深刻に受け止めている。ストライキへの支持は表明しても、実際にムハマディヤ会員がストライキに参加したり巻き込まれたりすることは予想していなかったのだろう。すでにストライキは終息したのにこのような呼び掛け文を掲載したのは、ムハマディヤが3月5日から年7日まで年次大会を控えていたからであろう。この年次会合は3年に一度の本部委員を選出し、会長を決定する重要な会議であった。それを乗り切るためにムハマディヤ本部の態度を明らかにする必要があったと考えられる。この年次大会については『スワラ・ムハマディヤ』に報告はあるが、この労働争議に関する言及はない［*Soeara Moehammadijah* 3(4), 1 April 1922: 1-13］。

一方、ムハマディヤ会員名簿では、イモギリからの入会者が1921年9月下旬から12月上旬までに70名記されており、その中には官営質屋職員が6人確認できる［*Soeara Moehammadijah* 5(5), 1924: 74-76; 5(6), 1924: 94, 95］[24]。同年12月14日、つまりこのストライキの直前にイモギリ支部の設立が承認された［Surat KHAD］。にわか作りの支部であることは否めない。この時期のムハマディヤ本部は支部設立に着手したばかりで、本部と支部をどうつなぐかはまだはっきりとした方針を持っているようには見えない。このイモギリ支部の「暴走」が本部に波及することの危険性を察知し、本部はストライキに関与していないことを明言して、ストライキからの撤退を呼びかけた、と考えられる。組織保全を最優先にしたのである。

[24] この名簿には必ずしも職業が記載されているわけではなく、また印刷が不鮮明な個所もある。ここにあげた数字は大体のものと見なした方が良い。なお、このふたつの号には表紙が欠落しているため、発行日が確定できない。

しかし、撤退表明は争議を支援したブミプトラ諸団体からは裏切り行為とみなされ、急進派民族主義団体からPEBに買収されたと非難された。原住民問題顧問官ホベー（E. Gobee, 1881-1954）は1922年5月2日付総督宛て文書で、「（ムハマディヤは）最近数ヶ月赤色分子からムハマディヤのしていることは本質的にPEBと同じだとますます厳しい批判を浴びせられている」［Kwantes 1975: 402］、と記している。とりわけ、スラカルタで発行されている『イスラーム・ブルグラック』（*Islam Bergerak*：動態のイスラーム）からの非難は激しかった。この週刊誌は先述のハジ・ミスバが創刊したものであるが、ミスバが収監されてからはファフロディンたちがその編集を手伝っていた。ファフロディンは5月にこれを去り、その後ハルソルメクソや他のメンバーもそれに続いた。ムハマディヤ本部議事録からも、ムハマディヤは外部からの批判に悩まされたことが窺える。しかし、ダフランはムハマディヤを攻撃する人や新聞・雑誌に対しては「放っておけ。ムハマディヤの人間は協会に対して慎重でなければならない」［NVHB（1922年8月11/12日）[25]］と、軽はずみな言動に釘を刺すにとどまった。

翌年ダフランが没した直後の年次総会（3月30日～4月2日）では、その半年前に出獄したミスバ他の非会員からなぜムハマディヤは政治に踏み込まないのかという問いが出された。それに対して、ファフロディンは次のように答えている。

> … ムハマディヤは、タブリグ、タマン・プスタカ、学校、PKO[26]といくつかの部署に分かれて活動している。それぞれはできる限りイスラーム法を念頭においている。ムハマディヤは団体としては政治を解さない、法（イスラーム法のこと：訳者注）によって宗教を理解するのみである。これは少なからずなされている。
>
> ムハマディヤにとって悲しむべきは以下のような状況である。プルグラカンの活動家（bangsa kaoem pergerakan）を見てみよう、イスラームの宗教法を顧みない人と実行する人とどちらが多いだろうか。イスラーム宗教団体であるムハマディヤは、できる限り義務としてこの問題に関心を払い、考慮している。なぜなら指導者というのは指導される人々がその真似をするからである。イスラームを自認する人、とりわけイスラームの指導者がこれを重視しないことは、ムハマディヤの信念に照らせば間違いである。これは非常に重要な義務である。イスラーム教徒は、子や孫がジャワの地に尊厳を感じ取り、我々の大地の恵みを享受するように、つまり民の暮らしが十分であることを心より願い、それを実感し

[25] 11/12日という表記は、会合が11日夜から始まり12日未明まで続いたことを示す。

[26] PKOとはムハマディヤの社会福祉部であるPenolong Kesengsaran Oemoem（社会貧窮救済部）のことであり、スジャックがその責任者であった。

なければならない。… 今、多くの人がイスラームを愛すと言いながらも、「イスラーム共同体（oemat Islam）」を分裂させようとしている …。［*Soewara Moehammadijah* 4(5-6), May-June 1923:109］

ムハマディヤがブミプトラ諸団体の中でも数少ない宗教団体であると自らを位置づけた。その上で、他の運動体が宗教法に思いをいたさないことやムスリム社会を分断させるような言動がはびこる状況を批判し、政治とは距離を置くことを明言した。支部のひとつでも反政府的な活動に巻き込まれると組織全体が崩壊の危機に瀕することを察知して現実的な判断が働いたことには言及していない。しかし、その発言の根底には民衆を巻き込んだ運動体であることを深く認識したことが見て取れる。特に、ファフロディンは、報道規制法違反に問われるという個人的な問題とは次元が異なり、自らの言動で組織全体のあり方が問われるという指導者としての責任を突き付けられた。それは、プロパガンディストとしては活躍しても組織構築には関わらなかったミスバとの違いであった。ファフロディンは、草の根のエネルギーを暴発させずに運動の活力へと導く役割を担う立場にあった。

3）ムハマディヤと利子

もうひとつの問題、PPPBから「利子を取った」とされる問題でも、ムハマディヤはかなりの攻撃を受けた。スルヨプラノトが編集する『ドゥニア・バル（*Doenia Baroe*: 新世界）』（出版地はジョクジャカルタ）の1922年7月26日・8月2日合併号には、ドゥラー・ラシ（Doelah Rasi）というペンネームの執筆者によるムハマディヤをこの問題で厳しく批判するコラムが掲載された。しかし、翌週の8月16日号にはムハマディヤのアシス（A. Asis）[27] が「ムハマディヤとPPPB」と題して次のような反論を寄稿した。長文ではあるが、事情がわかるためにそのまま訳出する。なお、この中の「MD会員」とは「ムハマディヤ会員」の略であり、明らかにファフロディンを指している。

1922年12月、PPPB本部委員2名がMD会員のもとを訪れた。印刷資材を買戻すために1,000ギルダーの借金をするのが目的であった。このMD会員は、自分は助けることができないがそれができる他の人を探す、と請け合った。たまたまその頃、このMD本部委員は差し迫った会合の準備で忙しかった。3日後にPPPB本部委員が再び訪れたが、彼はまだ何も知らせることができなかった。PPPB組合員は急いでこれに対応してくれるように頼んだ。このMD

[27] ムハマディヤの名簿に、A. Asisの名前は見当たらないが、恐らく1926年7月から一年間『スアラ・ムハマディヤ』の責任編集者となったアブドゥル・アズィズ（Abdoel Aziz）だと思われる。

本部委員はすぐに他の人物に支援を求めたところ、ひと月に25ギルダーの利息と50,000ギルダー相当の家*を担保にして貸すという条件であった。PPPB組合員はこれに同意した。

12月末にこの組合員は4,000ギルダーを借りるために再びMD会員のところへ来た。MD会員は何も約束できなかったが、支援ができそうなパクアラム家（注14参照）の人4、5人を紹介した。しかし、3日後にPPPB組合員は戻って来て、その人たちはせいぜい100ギルダーしか貸せないということだった。それゆえにPPPB組合員は何とかこの金を工面してくれと懇願した。このような大金を何に使うのかとMD会員が尋ねると、鉄道倉庫にある印刷資材を買い戻すためだとPPPB組合員は答えた。そうしないと1日30ギルダーの罰金を払わねばならない、と説明した。これを聞いたMD会員は、できるだけはやくできたら3日以内にその資金を調達する、と約束した。

3日後にPPPB組合員が再び来ると、MD会員は貸してくれる人を見つけたと告げた。しかしその貸手は、そのPPPB組合員もPPPB自体も知らないので、ムハマディヤが保証人になることを求めた。そうすれば4,000ギルダー貸すのに異存はないということだった。PPPB組合員がMD会員にムハマディヤが保証するのを説得してくれるように強く求めたので、MD会員は次の会議で諮ることを約束した。会議でこれが承認されると、MD会員はその決定を伝えるために再びパサル・グデ（Pasar Gedeh、ジョクジャ市の南西部）の金貸のもとへ行った**。金貸は、通常の金利月2パーセント、つまり4,000ギルダーに対して80ギルダーの利息を要求した。MD会員はこの利息の減額を頼み、最終的には月60ギルダーの利息に同意した。MD会員はそれで良いと言った。金貸はムハマディヤに適切な担保を要求した。MD会員はそれについては同僚会員と話し合うことを約束し、4,000ギルダーを受け取った。ムハマディヤは12,000ギルダー相当の自動車3台を担保に提供し、金貸は融資の確認書を受領した。

翌日、PPPB組合員はMD会員のもとへ来て4,000ギルダーを受け取り、契約に合意した。契約の概要は次の通りである。 PPPBはムハマディヤに対して5,720ギルダーの債務があり、そのための利息として1922年3月から1923年3月まで毎月60ギルダーを支払わなければならない。1923年3月にPPPBがムハマディヤに4,000ギルダーを返済できない場合、PPPBの印刷所はムハマディヤの所有物になるが、その際ムハマディヤは15,000ギルダーを追加で支払う必要がある。つまり、PPPBの印刷所は19,000ギルダーでムハマディヤに買い取られることになる。PPPB組合員によると、印刷所の価値は店舗を除くと24,000ギルダーであり、店舗を含めるとその価値は約35,000ギルダーである。しかし、担保と見なされるのは印刷所だけであり、店舗は含まれない。

PPPBが定められた期限に義務を履行できなければ、5,000ギルダーを失うことになる。しかしその年、PPPBは利益を得る機会があった。それでも、もしPPPBがムハマディヤに返済できなければ、ムハマディヤは8,000ギルダーを失うことになっていたであろう。なぜなら担保に入れた自動車は12,000ギルダーの価値があるのに、借金はたったの4,000ギルダーだったからだ。もしPPPBが債務を返済するならば、年間を通して毎月840ギルダーの利益を得ることになる。というのも、そのとき鉄道倉庫からその物品をおろすことができなければ、月額900ギルダーの費用がかかったからである。実際には月60ギルダーの利息を払うだけで

済んだ。ムハマディヤは一銭たりとも利子を取っていない、それどころか8,000ギルダーの損失を被る危険を冒していたのである。

読者はこれをよく考えてほしい。ムハマディヤはPPPBを助けたのか否か。『イスラーム・ブルグラック』やドゥラー・ルシに問う。あなたがたはPPPBを助けただろうか、また、PPPBの4,000ギルダーの負債をムハマディヤに返済するつもりでもあったのか。そうでないのなら、なぜPPPBを助けたいと叫ぶのだろうか。PPPBは叫び声ではなく、お金によって助けられる。

（『ドゥニア・バル』編集：…アシス君は怒るべきではない。このような問題が秘密にされていると、人はいかようにでも考える。編集部はムハマディヤが汚名をそそいだと考え、情報提供に感謝する。しかし、「高い木は風を受けやすい」ことを肝に銘じるべきだ）

［IPO 37, 1922 (*Doenia Baroe* 16 Augustus 1922)］

*後述する1923年のムハマディヤ年次総会でのファフロディンの説明によると、この家はファフロディンの自宅であるので、50,000ギルダーはあまりに高額であり、5,000ギルダーの間違いと思われる。

**同じく後述するファフロディンの説明からすると、この金貸を紹介したのはダフランであった。パサル・グデはジョクジャ市内のムハマディヤ活動の拠点のひとつだった。

具体的に担保物件と利率を示してムハマディヤが直面した状況を説明している。『イスラーム・ブルグラック』はこの問題では執拗にムハマディヤを攻撃したために、同時代の定期刊行物の中でも特に名指しされた。このドゥラー・ラシとアシスのコラムの掲載は、編集者のスルヨプラノトの配慮によるものと思われる。まずムハマディヤを批判する側に意見掲載の機会を与えたあと、それに対してムハマディヤ側にも反論を寄せる場を設定した。その上で、最後にはアシスの説明を受け容れ、ドゥラー・ラシの主張を退けた[28]。

このアシスのコラムがどれほど読まれたかは疑問である。というのも、翌年のムハマディヤ年次総会の一般会合では、やはりミスバたちから、利子問題について質問したからである。ファフロディンはかなり詳細に答え、その要約が次のように掲載された。

PPPB本部はハジ・ファフロディンから1,000ギルダー借用しようとしたが、ファフロディンに持ち合わせはなかった。そこで、借金の保証人になるように頼んだところ、ファフロディンは自分の家を担保にすることでこれを了承した。支払い期限が迫ってもPPPBは払う

[28] Shiraishi［1991: 253-254］もこの問題について触れ、ムハマディヤが利子を取ったという非難は不当だとしている。

ことができずに、ファフロディンの家は差し押さえに遭う寸前だった。

PPPB本部はまたファフロディンのところに来て、5,000ギルダーを借入れる必要があると説明した。その必要を慮り、ファフロディンは助けてくれる人を探す必要がある、もし誰も助けなければPPPBにとっては災難だ、と考えた。

あちこちを探し、また故キヤイ・ダフランも手伝ってくれて、助けてくれる人にいきついた。しかし、（貸主は：訳者注）PPPBとは面識がないし、その印刷所さえも知らないので、4,000ギルダーはムハマディヤ本部が担保するように要請された。利子はムハマディヤが担保するのであれば、通常よりも割引できるということであった。いつもは毎月20ギルダーの支払いだが、15ギルダーでよいとのことだった。よって一年での返済は4,720ギルダーだった。

これはPPPB本部をそこまで迫った災難から救うことができた。ムハマディヤは助けただけで、１パーセントたりとも利子を受け取っていない。これは監査委員会による検査を受けたばかりのムハマディヤの帳簿でも明らかである。

ムハマディヤはリバー（riba）[29] を払って借金をしたい人を助けてもいいのか。問題があるかどうかは、ムハマディヤは宗教法を知らない人よりも知っている。しかし、すべての人はこのようなことを考えても良いのではないか。

よって、PPPBは助けられたのだ。ムハマディヤは事情を知りもしない大勢の人に汚名を着せられている。間違っているのは誰だ。何が原因でそうなったのか。この説明が邪推した人たちを残念がらせるといいのだが。［*Soewara Moehammadijah* 4(5-6), May and June 1923:110］

ハジ・ミスバはその答えに満足した。しかし、なぜムハマディヤ本部は新聞・雑誌でそれを明らかにしないのか、世間では誤れる風評がいきわたっている、とも発言した［*Soewara Moehammadijah* 4(5-6), May and June 1923:110］。確かに風評はすでにいきわたっていた。ムハマディヤがPEB呼ばわりされることへの落胆は、ムハマディヤの学校で学ぶ生徒からも寄せられた［*Soewara Moehammadijah* 3(5), 1 May 1922: 1-3］。PEBは宗教指導者を取り込もうとしていたし、ムハマディヤを攻撃する側にとってはその攻撃の最良の方法はPEBと関係がありそうだと主張することであった［*De Indische Courant* 5 March 1923］。その後ムハマディヤ本部は地方支部がPEBと関係があるという報を受けると、即座にファフロディンを派遣して真偽を確かめるというほど神経をとがらせた［NVHB（1923年6月7日）］。

[29] イスラーム法では通常利子や利息は禁じられているが、禁止の対象となるのは高利だとする見解もある。この時代のムラユ語ではオランダ語のrente（利子）がより一般的に用いられ、アラビア語起源の「リバー」が用いられるときは禁止行為の意味が強い。

4）ムハマディヤ、ファフロディンにとっての教訓

PPPBとの関わりおよびその争議への支持表明は、組織としてのムハマディヤというよりはファフロディン個人のイスラーム同盟との関わりに引きずられたものだった。宣教部が公に争議へのシンパシーを示したのであれば、質屋職員を幹部に抱えるイモギリ支部がそれと同様の行動に出るのは自然な流れである。当時のムハマディヤは政治目的のある労働争議に関わった経験はなく、それがどういうことになるかを予想していなかったのではないか。末端組織の一部が争議に巻き込まれたことは組織拡大に乗り出したばかりのムハマディヤにとっては、致命傷になりかねなかった。また、ムハマディヤが多額の借金の保証人になったことも行きがかり上の出来事であり、組織としての方針ではない。このときのPPPBとムハマディヤの組織としての関係は、指導者同士の個人的な関係に左右されていたことがわかる。必ずしも財政的に余裕があるとは言えないムハマディヤが多額の他組織の借金の保証人になるのも、無謀のようにも思える。総じて、政治的経験の未熟さが見て取れる。

1922年4月からのムハマディヤ本部議事録からは、本部が地方の支部やグループとの連絡を密にとっていることが見て取れる。本部は定期的に支部からの報告書を要求し、報告が滞ったり問題が起きたことが伝わったりすると、その状況を確かめて問題に対処すべく本部委員を派遣した。ファフロディンは本部委員の中でもとりわけ精力的に地方を巡回した［小林 2024b］。組織の規定にはないが、地方のムハマディヤ・グループは、実績をあげて継続的活動ができることを本部が確認してから支部として承認されるようになった。また、支部承認後も本部の査察は続いた。宗教・社会活動を実行する支部を育成して、組織の着実な発展をはかったのである。

『イスラーム・ブルグラック』を去ったファフロディンとその仲間は、それから間もなく1923年1月に『ビンタン・イスラーム』（*Bintang Islam*：イスラームの星）（月2回発刊）を創刊した。これはムハマディヤの機関誌とは別個に、宗教知識や時事問題に関する情報を提供するだけでなく、ムハマディヤの見解を社会に向けて発信することを目的としていた。同時に『スワラ・ムハマディヤ』も全文ムラユ語になり、ジャワ語圏以外の地域への広報にも力を入れるようになったことが見て取れる。ムハマディヤが組織発展の準備を整えるのを見届けたかのように、同年2月28日ダフランはこの世を去った。

おわりに

1920年代初頭、自らの権益を主張して多くのブミプトラ団体が誕生して活動を展開する中、宗教社会団体ムハマディヤ会長のダフランは、政治的には中立的な立場をとっていた。しかし、その弟子の中でも頭角を現したファフロディンには政治的志向性があり、労働運動に活動の主力を注ぐイスラーム同盟中央の指導者と親しかった。その関係で、ファフロディンは1922年1月から2月にかけてジョクジャカルタを中心として起きた官営質業労働組合ストライキを支援する活動に加わり、ムハマディヤもそれに引きずられようにしてこの労働組合に関わった。このストライキは労働条件への不満が発端ではあったが、政治闘争へと拡大しそうになったところで政府の厳しい処置に阻まれて終息した。

ファフロディンは設立したばかりのイモギリ支部がストライキに参加したことに驚愕し、機関誌上でストライキからの撤退を呼びかけると同時にムハマディヤ本体は関わっていないことを示そうとした。ひとつの支部の問題が組織拡大を始めたばかりのムハマディヤ本体にも波及するという危険性を察知したからである。また、ファフロディンはPPPBの活動資金の調達にも関与し、自らの家を担保に差し出すだけではおさまらず、ムハマディヤの所有物件も担保にせざるとえない事態を引き起こした。そのため、ムハマディヤは宗教団体であるにもかかわらずイスラーム法では禁じられる利子を取ったという誤解を受け、非難を浴びる事態に陥った。

これに対してムハマディヤは、宗教に裏付けられなければ実践政治に関わることには意味を見出さないとして、宗教・社会運動に集中するという姿勢を明言した。特にファフロディンは政治経験の乏しい未熟さを痛感したのか、組織全体に責任のある本部委員としての立場を強く意識して、慎重に行動するようになった。組織構築においては、本部と支部が密接に連携するように精力を注ぎ、さらに創刊した『ビンタン・イスラーム』でムハマディヤの活動や立場を社会に発信し始めた。当初は「過激な」人物と見られていたファフロディンは、組織全体の保全を考えて活動する指導者に成長した、と言える。

ムハマディヤにとって官営質業労働組合ストライキに多少とも関与したことは、その政治的中立性を明確にするという意味でひとつの転機となった。運動の方針は経験を重ねる中で、形成されていったことがわかる。これは、やはり植民地官吏による報告書文だけではなく、ムスリム自身の声を聞くことができる同時代資料を丹念にあた

ることで明らかになってくる。しかしまた、植民地文書が不可欠であることは言うまでもない。本稿では、「利子を取った」とされた問題の経緯を、ムハマディヤの機関誌に掲載された情報と政府機関が発行するIPO提供の情報の二つで示した。この二つを比較すると、機関誌掲載のファフロディン弁明の要約だけでは事情を理解するのは難しい。少なくともこの時期のIPOの提供する情報がより詳細で正確であることも明らかになった。やはり資料の比較検討を怠ってはならない。

ただし、ムハマディヤが政治的中立を宣言したことを根拠にして、ムハマディヤが政府に対して常に協調的であったと言えるかは疑問である。というのは、ムハマディヤにとって譲れない問題、つまり宗教そのものに触れる問題に直面した場合には別の姿勢で対応したからだ。それに関しては別稿で論じるが、その作業をするときにもまずはムハマディヤ当事者の声をじっくり聴くための資料精査が最も重要であることは言うまでもない。

参考文献

文書

① オランダ国立文書館（Het Nationaal Archief）所蔵資料：Mailr.x No. 208, 1922.

② インドネシア国立文書館（Arsip Nasional Republik Indonesia）所蔵資料

Inventaris no.1802, Nomor Arsip 1-4888.“Notulen HB’s Verg. April 1922- Moehammadijah. D.R.”［NHBV］

③ ムハマディヤ公開デジタル資料

“Surat KHA Dahlan.”［Surat KHAD］

https://sejarahmu.umy.ac.id/wp-content/uploads/2022/10/KOLA762.pdf

政府刊行物

Overzicht van de Inlandsche en Maleisch-Chineesche Pers 37,1922.

新聞・定期刊行物

Bataviaasch Nieuwsblad 10 March 1922; 2 March 1923.

De Indier, 27 April 1918.

De Indische Courant, 9 February 1922; 20 February 1922; 5 March 1923.

De Locomotief, 1 December 1919.

De Preangerbode, 20 January 1922; 8 March 1922.

Het Nieuws van den Dag, 2 February 1922.

Soewara Moehammadijah 3(3), 1 March 1922; 3(4), 1 April 1922; 3(5), 1 May 1922; 4(5-6), May and June 1923; *Soeara Moehammadijah* 5(5), 5(6) 1924.

論文・刊行本

Alfian. 1989. *Muhammadiyah: The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization under Dutch Colonialism.* Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.

Hadjid, KRH. 2018. *Pelajaran Kiai Haji Ahmad Dahlan: 7 Falsafah dan 17 Kelompok Ayat al Qur'an.* Yogyakarta: Suara Muhammadiyah.

Ingelson, John. 1986. *In search of justice: workers and unions in colonial Java, 1908-1926.* Oxford: Oxford University Press.

Kwantes, R.C. 1975. *De Ontwikkeling van de Nationalistische Beweging in Nederlandsch-Indië:Bronnenpublikatie,* Eertste stuk 1917-Medio 1923. Groningen: H.D. Tjeenk Willink.

Malaka, Tan. 1922. *Toendoek kepada Kekoeasaan, tetapi tidak toendoek kepada Keberanian.* Berlin.

McVey, Ruth T. 2006. *The Rise of Indonesian Communism.* Jakarta and Singapore: EQUINOX. (First published by Cornell University Press, 1965)

Petrus Blumberger, J.Th. 1931. *De Nationalistische Beweging in Nederlandsch-Indië.* Haarlem: H.D. Tjeenk Willink.

Shiraishi, Takashi. 1990. *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1926.* Ithaca and London: Cornell University Press.

Syuja'. 2009. *Islam Berkemajuan: Kisah Perjuangan K.H. Ahmad Dahlan dan Muhammadiyah Masa Awal.* Pengantar: Abdul Mu'ti. Tangerang: Al-Wasath.

小林寧子. 2014.「変容するナフダトゥル・ウラマーの二重指導体制：ウラマーの権威と指導力の乖離」、『アジア経済』55（3）: 56-85.

——. 2015.「第33回ナフダトゥル・ウラマー全国大会：総裁選出方法をめぐる対立」、『アジア・アフリカ地域研究』15（1）: 71-93.

——. 2022 「1920年代のムハマディヤを語る二つの定期刊行物：『スアラ・ムハマディヤ *Soeara Moehammadijah*』と『ビンタン・イスラーム*Bintang Islam*』、『アカデミア』社会科学編(23): 163-180。

——. 2023a「1921年ムハマディヤ本部文書：Surat KH Ahmad Dahlan（ダフラン書簡）」、

『アカデミア』社会科学編、25: 353-365.
——. 2023b「初期ムハマディヤ指導者ファフロディンに関する一考察：『スリ・ディポネゴロ（*Sri Diponegoro*）』のオランダ語摘要（IPO）を手がかりとして」『東南アジア：歴史と文化』（52）: 40-60.
——. 2024a「「人間の絆」アフマド・ダフラン著」『アカデミア』社会科学編（27）、2024年6月: 273-280.
——. 2024b「初期ムハマディヤの組織整備：2つの本部資料（1921 ～ 25年）に基づいて」『東南アジア：歴史と文化』（53）: 5-31.
土屋健治. 1982.『インドネシア民族主義の源流：タマン・シスワの成立と展開』創文社.
永積　昭. 1971.「1922年の国営質屋労働組合争議とインドネシア諸政党」『アジア・アフリカ言語文化研究 (4), 113-129.
中村光男. 1994.「ムハマディヤ」、石井米雄監『インドネシアの事典』同朋舎：424-425.
深見純生. 1983.「インドネシアにおける労働運動の形成と展開」『歴史学研究』515: 50-66.
水野広祐. 2020.『民主化と労使関係：インドネシアのムシャワラー労使紛争処理と行動主義の源流』京都大学出版会.